

「京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援と  
学生によるフィリピン政府に対する事業結果のフィードバック参加報告書」

京都大学文学部4年 額田聖菜

前期のアジア研究(移民)の授業を受け、移民の問題について関心を持っていたことから、フィリピンにルーツのある子供たちに対する学習支援のボランティアに参加しました。今回の派遣では、フィリピン政府の在外フィリピン人委員会の方々に学習支援の現状を伝え、日本へ来る方々にレクチャーをしました。また、NGO、アジア開発銀行、そしてフィリピン大学を訪問しました。今回の研修は、私にとってフィリピンの現状を通して移民の問題、そして貧困の問題について考えるものでした。

レクチャーの受講者は各回20人前後と比較的少人数であったため、直接質問をしたり話を伺ったりする機会がありました。その中で驚いたことは、多くの人が日本での生活のビジョンを持っていないこと、そして私たちの考える結婚感とは異なることでした。参加者はフィリピンに残る家族へ送金することを考えており、多い人では12人もの家族のメンバーを送金で支えようと考えていました。しかし日本でどこに住むのか、またどういった仕事をしたいかと尋ねても、まだ決めていないという人がたくさんいました。日本語を話せない人が多く、日本でできる仕事は限られていると思われるなか、そんなに無計画でいいのだろうかとか彼らの日本での生活に対し、不安を感じました。レクチャーはすべて英語でしたが、受講者との距離が近かったため、用意した原稿を持たずに受講者の反応を見ながら発表をしました。初めは詰まってしまうこともありましたが、回を重ねるごとにスムーズにできるようになりました。こういった経験は、今後の英語での発表において自信を持たせてくれるものになると思います。

日本から帰国したフィリピン人女性を支援するNGOへ訪問した際には、日本で暮らす間だけでなく、フィリピンへ帰国した後も人々は問題を抱えるのだと知りました。主にエンターテイナーとして日本で生活したことで差別を受け、元のコミュニティには戻れないと聞き、驚きました。国を超えることは技術的に簡単になりましたが、社会的にはまだまだ難しいものであるし、常に弱者になるのは移住した人々であるのだと気づきました。このように、日本への移住を希望する人々と話をするなかで、私たちが行っている学習支援のボランティアは、フィリピンと日本の間の移民の問題のごく一部分であると感じました。そして、この移民の問題の根本はフィリピンの貧困問題にもつながっていると感じました。

ストリートチルドレンを支援するNGOへ行き、話を伺いました。想像できないような環境と、そこから抜け出すことの難しさを聞き、理不尽さを感じました。話を聞き、そんな辛い環境で苦しんでいる子供たちを私は想像していました。しかし実際にストリートチルドレンだった子供たちを保護する施設に伺った際、元気に走り回る子供たちを見て驚きました。確かに彼らの体は細かったですが、みな笑顔で、そこに彼らの強さ、たくましさを感じました。子どもたちは自分の夢を語ってくれました。自分が同じ環境で、彼らのように笑えるだろうか、という思いが頭から離れませんでした。翌日訪れたインフォーマルセクターでも、同じことを思いました。川沿いに密集するように家が並び、迷路のようになっている中を子供たちは元気に走り回っていました。とても狭い空間に犬や猫、鳥と一緒に生活をしていました。動物を飼っているため臭いもきつく、また電灯もなく、真っ暗でした。しかしそこに住む子供たちも笑顔でした。ご飯を十分に食べられなくても、しっかりした家がなくても、十分に学校に通えなくても、彼らはそこで笑顔で生活をしていました。私には多くの問題がある環境のように思いましたが、そこでも笑顔で生活する子供たちの強さに心を打たれました。

滞在中マニラ市内を車で移動する際にも、橋の下、線路の脇、路上、あらゆるところでおなじような貧困コミュニティを見かけました。高い商品を扱うモールや五つ星ホテルがある同じ都市の中で、そういった貧困地域が共存していることに矛盾を感じずにはいられませんでした。経済格差のあまりの大きさに愕然としました。どうして同じ国内でもこんなに格差が生まれてしまうのだろうかと考えずにはいられませんでした。

今回の研修を通して、実際に学習支援でかかわっている子供たちの母国であるフィリピンについてよりよく知ることができました。特に学習支援に行った当初は、自身がフィリピンについて無知であり、恥ずかしいような申し訳ないような気持ちがありました。今回の派遣でフィリピンを訪ねたことは今後学習支援のなかで、彼らとより深いコミュニケーションをとる上で役立つと思います。

また、研修を通して改めて現地・現場へ行くことの大切さを感じました。他人から話を聞くのではなく、自分が実際にその地へ行って体験したり、人々と関わりを持ったりすることは、多くの情報を含んでいると改めて感じました。貧困問題も、移民の問題も一朝一夕で解決できるものではないと思います。個人や民間のレベルだけでなく、国家レベルでの取り組みが必要であると思います。自分にできることはすごく小さいかもしれませんが、しかしそういった問題から目をそらさず、今後も考え、関わっていきたいと思います。